

から建壇安彦命或は茨田大郎女の御名が取られたとも、または一旦地名が御母の名にとられ、それから間接にその御子につけられるやうになつたのであるとも、何れともいはれるわけでありませう。従つて、その直接であるか間接であるかといふ區別は、随分むづかしい。かかる場合には、やはり前の地名によれる名と申す種類の中に入れて、但し御母の居住の地名にもとづいた名であると申したら、さしつかへはなからうと考へます。

(つゞく)

血なふむ

鼠の音の

寒さかな

蕪村

寄書

所感の一節

和田藏子



凡そ兒を育つるは、恰も園中の草木を培養するやうに、善く草木の性を知り、雑草を抜取り、曲れるは直し、よき花を開き、實を結ぶのを望む如く、何れの親も、出來得る限りの保育をなして、立身出世させ、幸福を得させたいと、誰も願望する所でありませうが、兩親たる者、如何程注意して、其の子供を養育すればとて、乳母下婢たる者が、育兒の心得なき時は、折角の心盡しも、何の効もなき事となりませう。

當時二三の家庭にては、右の者を雇ふのに、其

の性質行爲の善惡をも辨へずして、きめるのあまり、子供に、思はざる感化を興へる事の多きは、如何にも歎わしい事でありませす。

嘗て、市街通行の折、或附添人の、三四歳位の幼兒を連れ、野鄙の流行節を教へ、已も共にうたひて、誤れるを正し、意に従はぬとて、其の子の遊を妨げ居るのを、傍觀した事がございませすが、余り見兼ねましたから、附添人に、もつと、丁寧な世話して、たわけなさいと申しました所が、黙つて、去つてしまいました。

其の後、知人の所へ行きました時、其處へ遊びに来た、哀なる小兒を見ました、附添人老人の申すに「此子は、前には、自由に、歩行し、談話も、いたしましたが、一ヶ年程前に、或温泉場へ行き歸京するや、歩行言語、共に叶はず、多くの醫師

の、診察を受けました、充分の効がありませんしかし、此頃、漸やく、歩行だけは、出来るやうに、なりました」と云つて居りました。

此時、小兒は、少しも、動きまわる様な事なくやがて、二時間、一定の場所にて、玩具を持ち、遊んで居りまして、時々、附添人に、何か、話しかくる様のあるや、未だ子供の發言せぬうち、附添人、直に承知し居るのを數回傍觀しました。

右につき、考へますに、前者は、附添人の選擇より、幼兒をして、斯かる、不幸な目に、遇はせるので、母親たる者、少しく注意すれば、小兒を幸福にさせる事が、できると思ひませす。

後者に付ては、一寸、云つて見たい意志が、出て来て、少し、發言せんとするや、云はぬうちに承知するものですから、子供はやめてしまいます

が右は、不敏のあまり、注意が過ぎて、却て、發音の場合を、妨ぐるになるので、實際は、注意が足らぬ者であると、思ひます。

斯かる者共に、大切の愛兒を、托して置くのは實に、口惜しき事でありませう！

嗚呼、幼兒附添人について、適當なる者を求むるは、誠に、困難でありますが、つまり、性質温良、且つ正直なる者に托し、母たる者は、假令、吾子を、預けたりとも、決して、其の職分を讓渡したと、思ふことなく、いつも、其の取扱等に注意し、漸々に、目的の針路に、教へ導くやうにいたしたいと思ひます。

私は、日々幼稚園にて、中以下の、子供と共に楽しく暮して居りますが、いつも、園の内外にて右の事につき、感ずる事のあまり、誠に、くだら

ぬ事ながら、少々、紙端を拜借致して、斯くは記しました。

「貞女兩夫二見エズ」の格言は之を勵行するの必要ありや

長野縣高遠 廣 瀬 生

婚冠葬祭とて、婚姻は一生の大事人倫の大道にして、之に依りて一生の苦樂及び、一般社會國家に對し、様様の義務を生ずる者なれば、大に熟考の上目的を誤らぬ様せざる可からず、其目的は何かと云はば、云ふ迄も無く、種族の保存と休養安慰の地を與ふる事となり、而して、如何に目的を達し、圓滿に生活し居たりとて、人生の事は一日も計れぬものなれば、一旦、夫不幸にも、不歸の客となる事あらんか、貞女兩夫に見えぬが是か、